逐條土地收用法資料（五）

高坂孝三

第六條　本法又ハ本法ニ基ツキテ發スル命令ニ規定シタル期間ノ計算法、通知ノ方法及書類ノ送達ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

土地收用法第六條ニ基ツキテ發スル命令ノ件

（明治三十三年三月三十一日　勅令第一〇〇號）

第一條　本令ハ土地收用法又ハ土地收用法ニ基ツキテ發スル命令ニ規定シタル期間ノ計算法、通知ノ方法及書類ノ送達ニ關シテ之ヲ適用ス

第二條　期間ヲ定ムルニ時ヲ以テシタルトキハ即時ヨリ之ヲ起算ス

第三條　期間ヲ定ムルニ日、週、月又ハ年ヲ以テシタルトキハ期間ノ初日ハ之ヲ算入セス但シ其ノ期間カ午前零時ヨリ始マルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テハ期間ノ末日ノ終了ヲ以テ期間ノ滿了トス

第四條　期間ノ末日カ大祭日、日曜日ニ當ルトキハ期間ハ其ノ翌日ヲ以テ滿了ス但シ行政廳ニ對スル期間ハ其ノ末日カ行政廳ノ休日ニ當ルトキハ其ノ休日ノ終了シタル翌日ヲ以テ滿了ス

第五條　期間ヲ定ムルニ週、月又ハ年ヲ以テシタルトキハ曆ニ從ヒテ之ヲ算ス

週、月又ハ年ノ始メヨリ期間ヲ計算セサルトキハ其ノ期間ハ最後ノ週、月又ハ年ニ於テ其ノ起算日ニ應當スル日ノ前日ヲ以テ滿了ス但シ月又ハ年ヲ以テ期間ヲ定メタル場合ニ於テ最後ノ月ニ應當日ナキトキハ其ノ月ノ末日ヲ以テ滿了ス

第六條　土地收用法第十八條、第二十五條及第三十四條ノ期間ハ郵便ニ依リ書類ヲ差出シタル場合ニ於テハ其ノ遞送ニ要スル日時ヲ算入セス

第七條　通知ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ但シ內務大臣カ定メタル場合ニ於テハ口頭ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第八條　書類ノ送達ニシテ送達者自ラ送達セサル場合ニ於テハ使丁又ハ書留郵便ニ依ルコトヲ得

第九條　數人カ一人ノ代理人ヲ有スル場合ニ於テ其ノ代理人ニ爲スヘキ送達ハ一通ノ書類ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

一人カ數人ノ代理人ヲ有スル場合ニ於テ其ノ代理人ニ爲スヘキ送達ハ其ノ一人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十條　委任ニ因ル代理人アル場合ニ於テモ其ノ委任者ニ爲シタル送達ハ其ノ效力ヲ妨ケス

第十一條　無能力者ニ對スル送達ハ其ノ法定代理人ニ之ヲ爲スヘシ但シ委任ニ因ル代理人アルトキハ此ノ限ニ在ラス

法人又ハ組合ニ對スル送達ハ其ノ代表者又ハ業務執行者ニ之ヲ爲スヘシ

前項ノ代表者又ハ業務執行者數人アル場合ニ於テハ送達ハ其ノ一人ニ之ヲ爲スコトヲ得

組合ニシテ業務執行者ヲ定メサル場合ニ於テハ送達ハ其ノ組合員ノ一人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十二條　現役及召集中ノ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル下士以下ノ軍人ニ對スル送達ハ其ノ所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十三條　在監人ニ對スル送達ハ其ノ監獄ノ首長ニ之ヲ爲スヘシ

第十四條　送達ハ送達ヲ受クヘキ人ノ現所在地ニ之ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ハ送達ヲ受クヘキ人カ其ノ地ニ於テ住所、居所又ハ事務所ヲ有スル場合ニ於テ其ノ受領ヲ拒ミタルトキハ之ヲ通用セス

第十五條　送達ヲ受クヘキ人ノ住所、居所又ハ事務所ニ在ラサルトキハ其ノ送達ハ現場ニ在ル成年ノ同居者又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十一條第二項ノ場合ニ於テ代表者又ハ業務執行者人務所ニ在ラサルトキハ送達ハ現場ニ在ル他ノ役員又ハ成年ノ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ送達ヲ爲スコト能ハサルトキハ其ノ送達ハ交付スヘキ書類ヲ其ノ地ノ市長村長ニ預ケ送達ノ告知書ヲ作リ之ヲ住所又ハ居所ノ門戸ニ貼付シ且近鄰ニ住居スル者二人以上ニ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第十六條　法令上ノ理由ナクシテ送達書類ヲ受領セス又ハ受領スルコト能ハサルトキハ其ノ書類ヲ送達ノ場所ニ差置クコト

ヲ得此ノ場合ニ於テハ送達人ハ其ノ調書ヲ作ルヘシ

第十七條　書類ノ送達ヲ受領シタル者ハ其ノ場所及年月日時ヲ記載セル受領證ヲ交付スヘシ

前項ノ受領證ヲ交付セス又ハ交付スルコト能ハサルトキ又ハ

第十五條第三項ノ規定ニ依リ送達ヲ爲シタルトキハ送達人ハ其ノ調書ヲ作ルヘシ

第十八條　送達ヲ受クヘキ者ノ住所、居所又ハ事務所不明ナルトキハ收用又ハ使用スヘキ土地所在地ノ市町村長ニ於テ之ヲ公告スヘシ

前項ノ場合ニ於テ公告ノ日ヨリ一週間ヲ經過シタルトキハ送達ヲ爲シタルモノト看做ス

第十九條　書類ノ送達ニ關スル規定ハ通知ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第二十條　訴願又ハ行政訴訟提起期間ノ計算法ハ訴願法行政裁判法及民事訴訟法ノ規定ヲ適用ス

第二十一條　書留郵便ニ依リテ爲ス送達ニ付テハ郵便ニ關スル法令ノ規定ヲ適用ス

附　則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第七條　本法ノ規定ハ水ノ使用ニ關スル權利其ノ他土地ニ關スル所有權以外ノ權利ノ收用又ハ使用ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

註、國家總動員法第十四條　政府ハ戰時ニ際シ國家總動員上必要アルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ鑛業權、砂鑛權及水ノ使用ニ關スル權利ヲ使用又ハ收用スルコトヲ得

一、公有水面埋立免許權ノ收用

（內務明治三十三年九月十三日丘甲第一九二號福岡縣知事宛　土木局長回答）

（要旨）公有水面埋立ノ被免許人ハ工事竣功ノ上ニ於テ埋立地ノ幾分ノ所有權ヲ取得スヘキ一ノ希望ヲ有スルニ止マリ免許ニ因リ直ニ物權類似ノ私權ヲ取得スルモノニ非サルヲ以テ其ノ免許權ハ收用ノ目的トナリ得ヘキモノニ非ス

（原文）本年八月二十日發二第百四十八號ヲ以テ土地收用法適用ノ件御伺出相成候處公有水面埋立ノ出願ニ對シ行政廳ノ與フル免許ハ單ニ埋立工事ナル一ノ行爲ヲ爲スコトヲ特定ノ人ニ特許スルモノニシテ被免許人ハ其ノ工事竣功ノ上ニ於テ埋立地ノ幾分ノ所有權ヲ取得スヘキ一ノ希望ヲ有スルニ止マリ決シテ其ノ免許ニ依リ直ニ物權類似ノ私權ヲ取得シタルモノニ非ス隨テ其ノ免許權ナルモノハ收用ノ目的トナリ得ヘキモノニ無之ト存候

條右樣御承知相成度依命及通牒候也

（福岡縣知事伺）鐵道敷設ノ爲メ土地收用法ニ依リ內閣ニ於テ工事認定ノ區域中公有水面埋立免許ヲ爲シタル箇所有之右ハ一旦埋立免許ヲ得タル以上ハ多少ノ費用ヲ要シ居候義ニ付無償ヲ以テ返還セシムヘキ理由無之ノミナラス免許命令ノ上ニ於テモ何等條項無之ヲ以テ取消處分等難成相又之ヲ此儘放任スルトキハ協議ハ何時迄モ整ハサルヲ以テ爲メニ全線路ノ事業ヲ遲滯セシムル義ニ有之候條土地收用法ノ規定ヲ適用シ可然哉目下差懸リタル義有之折返シ御指揮相成度此段相伺候也

註一、公有水面埋立免許權ノ收用ニ關シテハ第三十一議會（大正二―三）ノ衆議院ニ於テ議員漆原嚴氏ヨリ次ノ如キ本法改正案ノ提出ガ有ツタガ通過シナカツタ。同氏說明「收用法第七條中ニ……本法ノ規定ハ次ヘ持ツテ行ツテ『公有水面埋立、漁業』斯ウ云フ八字ヲ加ヘ度イ斯ウ申スノデアリマス、而シテ改正ノ理由ハ港灣、運河、私設鐵道其ノ他斯ウ云フ權利ヲ持ツテ居ル者ガ起業スルニ當ツテ……收用ショウト思フ場合ニ準據スベキ法律ガ御座イマセンカラ此ノ改正ノ必要ヲ感ジタノデアリマス」

二、公有水面埋立免許權ノ性質ノ說明トシテ前記內務省ノ意見ト異ル次ノ如キ判例ガ有ル。

大審院「公有水面埋立免許權ハ公有水面ヲ埋立テ民有地ト爲ス目的ヲ以テ官ノ免許ヲ得タル權利ニシテ埋立免許權者ハ其ノ埋立ヲ條件トシテ之カ所有權ヲ取得スルモノナレハ私權ノ範疇ニ屬スルモノトス勿論埋立權ノ取得ハ行政官廳ノ免許ヲ要スト雖モ此ノ行政處分タル、事實カ單純ナル私益ニ止マラス公共ノ利益ニ影響スルモノナルカ爲監督ノ必要ニ基クモノニシテ之カ爲メ埋立免許權ヲ目スルニ公權ヲ以テスヘキモノニ非サルノミナラス明治二十三年內務省訓令第三號第二條第九項ニ埋立免許權ハ官許ヲ條件トシテ擔保貸付ニ供シ又ハ移轉スルコトヲ得ル趣旨ヲ定メアルニ徵スレハ之ヲ以テ一種私法上ノ財產權ト爲ス法意ナルコト疑ヲ容レス」（大正六年八月二十一日言渡）

三、現行法タル公有水面埋立法（大正十年法律第五七號、同十一年四月十日施行）ニ於テモ埋立免許權ノ性質ハ前示判例ト同樣ニ解スベキコト同法第十六條第二十四條等ノ規定ニ徵シ明デアル。故ニ土地收用法第七條ニ所謂土地ニ關スル權利中ニハ埋立免許權ハ性質上當然包含セラレルト解スルハ何等支障ナキモノノ如クニモ考ヘラレル。然シ公有水面埋立法ハ法令ニ依リ土地ヲ收用又ハ使用ス

ルコトヲ得ル事業ノ爲必要ナルトキハ免許ノ取消ヲ爲シ得ル旨規定シタ爲ニ斯カル解釋ヲ俟ツ迄モナク實際上ハ收用法外ノ手段ニヨリ所期ノ結果ヲ收メ得ルコトトナツタ（同法第三十二條）。

二、起業者ニ賣渡シタル土地ニ對スル賣渡人ノ使用權ノ收用

（行裁昭和三年第一一八號同四年七月十八日宣告）

（要旨）内閣ノ認定ヲ受ケタル事業ノ起業者ニ讓渡シタル該事業ニ要スル土地ヲ或ル時期迄從前通リ使用スル讓渡人ノ權利ハ土地收用法第七條ニ該當スルモノト解スルヲ相當トス從テ右土地ノ上ニ在ル地上物件ノ移轉ニ關シ賣渡人ト起業者トノ間ニ契約カ存スルト否トニ拘ラス該權利ハ土地收用法ニ依リ收用シ得ルモノトス

（判決理由）按スルニ原告ハ參加人ニ賣渡シタル大阪府北河内郡守口町大字守口三番地ノ四宅地ニ其ノ建物ヲ所有セルコト地上物件ノ移轉ニ付テハ後日協定スヘク右移轉料支拂迄ハ原告ヲシテ該土地ヲ從前通リ使用セシムルコトノ約諾ノ下ニ原告カ該土地ヲ使用シ居リタルコト及該土地ハ軌道敷設事業ニ要スルモノニシテ内閣ノ認定ヲ受ケ且大阪府知事ノ收用土地細目公告中ニ包含セラルルモノナルコトハ當事者間爭ナキ事實ナリ而シテ右移轉料支拂迄原告カ右土地ヲ從前通リ使用スル權利ハ土地收用法第七條ニ所謂土地ニ關スル所有權以外ノ權利ニ該當スルモノト解スルヲ相當トスルカ故ニ起業者タル參加人ニ於テ軌道敷設ノ爲必要アル以上土地收用法ニ依リ之ヲ收用シタルハ違法ナリト云フコトヲ得ス原告ハ右地上物件ノ移轉ニ付テハ參加人ト原告トノ間ニ移轉契約カ土地賣買當時ニ於テハ成立シ居リ唯其ノ金額カ具體的ニ明示セラレサリシニ過キサルモノナルヲ以テ協議不調ノ場合ニ適用スヘキ土地收用法ヲ本件ノ場合ニ適用シタルハ違法ナリト主張スルモ收用當時ニ於テ右權利カ存在スル以上原告ノ所謂地上物件ノ移轉契約カ成立シ居ルト否トニ拘ラス土地收用法ニ依リ該權利ヲ收用スルヲ妨ケサルモノトス

三、土地ニ關スル期限付權利ノ收用

（行裁昭和三年第一八一號同四年七月十八日宣告）

（要旨）期限付ノ權利ト雖モ其ノ期限到來以前ニ内閣ノ認定ヲ受ケタル事業ノ爲之ヲ消滅セシムル必要アルトキハ土地收用法ニ依リ之ヲ收用スルコトヲ得ルモノトス

(判決理由) 按スルニ原告ハ參加人ニ賣渡シタル大阪府北河内郡守口町大字守口三番地ノ四宅地ニ其ノ建物ヲ所有セルコト、地上物件ノ移轉ニ付テハ後日協定スヘク右移轉料支拂迄ハ原告ヲシテ從前通リ使用セシムルコトノ約諾ノ下ニ原告カ該土地ヲ使用シ居リタルコト及該土地ハ敷道敷設事業ニ要スルモノニシテ内閣ノ認定ヲ受ケ且大阪府知事ノ地用土地細目公告中ニ包含セラルルモノナルコトハ當事者間爭ナキ事實ナリ……原告ハ斯クノ如キ使用權ハ移轉料支拂ノ時期又ハ參加人カ該土地ヲ使用スル時期迄存在スルモノニシテ無期限ニアラス故ニ斯ノ如キ事業ニ對シテハ土地收用法ヲ適用スヘキモノニアラスト云フモ期限付ノ權利ト雖其ノ期限到來以前ニ消滅セシムルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ收用スルハ違法ニアラス

四、漁業權ノ收用

(四六議會 大正十二年三月三、六日 衆議院特別委員會)

(要旨) 漁業法第七條ニ依レハ漁業權ハ物權ト看做サレ土地ニ關スル規定ヲ準用セラルルモ土地收用法第七條ニ所謂土地ニ關スル權利ニ非サルヲ以テ之ヲ收用ノ目的ト爲シ得ヘキニ非ス

(問) 漁業權ニ付テハ收用ノ場合ニ補償スベシト云フ事ハ漁業法制定當時今ノ大審院長ガ司法省民刑局長トシテ衆議院ニ出席サレテ答辯サレテ居リマス……漁業權ハ他ノ不動産物權ト同ジ樣ニ法律デハ定メテ居ル、是ガ築港若クハ埋立ニ依ツテ收用サレルコトガ有ルノデス……近來土地ガ騰貴致シマシタ結果港灣沿岸ノ土地ガ埋立テラレル爲ニ養殖場等ガ屢々此ノ運命ニ遭遇スル、只今東京市ニ於テモ築港計畫ノ爲ニ又ハ埋立事業ノ爲ニ此ノ事ガ起ツテ居リマス、是モ漁業法ノ物權ト看做スコトカラ收用ノ必要ガ起ツテ來ルト思ヒマス、矢張文字ノ上ニ入レテ置ク方ガ是等ノ權利ヲ有スル者ノ爲ニ便宜デアル、又行政上モ其ノ解釋ニ付テ爭議ガ起ルト云フコトガ無クナルト思ヒマスガ之ニ付テ政府ノ御意見ヲ承リ度イ

(政府委員答) 漁業權ニ付テノ御質問デアリマスガ、成程漁業法ノ第七條ニハ漁業權ハ物權ト看做シテ土地ニ關スル規定ヲ準用シテ居リマスケレ共、唯收用法ノ第一章ニ於キマシテハ土地ニ關スル所有權以外ノ權利ノ收用又ハ使用ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用スルト云フ風ニ書イテアリマスガ、漁業權ハ直接土地ニ關スル權利デアリマセヌカラ之ヲ收用ノ目的トスルト云フコトハ現在ノ行政ノ取扱トシテハ致シテ居リマセヌ、此ノ點ニ付キマシテ埋立ナドヲスル場合ニ漁業權者ト埋立免許權者トノ間ニ利害ノ

衝突ガ有リマスガ是ハ公有水面埋立法第五條ニ依テ救濟ノ途ガ付クト考ヘテ居リマス……

土地收用法ノ本體ガ土地ニ關スル權利ノ收用又ハ使用ト云フコトヲ原則トシテ居リマスノデ此ノ水面使用ノ權利ニ迄此ノ法律ヲ擴張シテ之ニ土地收用法ヲ適用スルガ宜イカ惡イカト云フコトハ立法政策ノ上デ大ニ考慮ヲ要スル問題ダト考ヘマスノデ、政府デハ其ノ點ニ付テハ之ヲ提案スル樣ナ時機ニ達シテ居リマセヌノデ、土地收用法ノ改正ヲ其ノ點ニ迄及ボサナカツタノデアリマス……

此ノ外尙ホ鑛業權等ニ付テモ矢張同一ノ問題ガ有ルノデアリマス、サウ云フ樣ナ各種ノ民業ニ伴フ權利ヲ收用スル場合ニハ土地收用法ニ準據スルガ宜イカ何ウカ或ハ特別ノ系統ニ屬スルモノトシテ獨立ノ立法ヲスルガ宜イカ何ウカト云フコトハ大ニ攻究ヲ要スル問題ト考ヘマスカラ其ノ點ヲ御含置ヲ願ヒマス

(問)漁業權ノ事ヲモウ一度伺ヒ度イ、第七條ハ土地ニ關スル規定ヲ準用ストアリマスガ只今準用出來ナイ樣ニ聽キマシタガ其處ヲハツキリシテ置キ度イ

(政府委員答)漁業權ハ物權ト看做シテ土地ニ關スル規定ヲ準用シマスケレ共、漁業權ハ土地ニ關スル權利デアリマセヌカラ第七條ノ中ニ這入ラナイト云フ事ヲ申シマシタノデス

註一、漁業權ノ收用ニ關スル本法ノ改正意見ニ付テハ前出「公有水面埋立免許權ノ收用」ノ註一、ニ引用シタ通リデアル。

二、漁業權ノ收用ニ關スル學說

美濃部博士「漁業權及ビ入漁權モ公ノ水域ノ上ニ存スル權利デ謂ハバ水上物權デアリ法律ノ所謂『水ノ使用ニ關スル權利』ノ一種デアルカラ等シク收用ノ目的トナリ得ル」(公用收用法原理二五五頁)

田中好氏「此ノ權利ハ土地ニ關スル規定ヲ準用スルダケデ土地ニ關スル權利デハナイ。……行政ノ實際ハ之ヲ收用スルコトヲ得ルモノト爲スヤウデアルガ理論上ハ之ヲ否定スベキデアル或ハ水ノ使用ニ關スル權利トシテ收用スルヲ得ベキコトヲ說明スル者ガアルガ、權利ノ性質ハ水ノ利用ヲ前提トスル行爲權デアルカラ水ニ關スル權利ト言フコトガ出來ナイノデアル」(高等土木工學第一八卷土木行政四四六頁)

武井群嗣氏「漁業法ニ於テハ之ヲ物權ト看做シ土地ニ關スル規定ヲ準用スルガ其ノ土地ニ關スル權利ニ非ザルハ疑ナク然ラバ水ニ關スル權利ナリヤト云フニ漁業トハ營利ノ目的ヲ以テスル水產動植物ノ採捕又ハ養殖ノ業ヲ謂

フノデアルカラ之ヲ肯定スルコトニ躊躇ヲ要スル。併シ漁業登錄令ニハ土地收用法ニ依リ漁業權ヲ收用シタル場合ノ登錄ニ關スル規定ノ存スルニ徵スレバ行政ノ實際ニ於テハ漁業權ヲ以テ一定ノ水域ヲ客體トスル物權ナリト解シ土地收用法ニ所謂水ノ使用ニ關スル權利ト見ル學說ニ從ヒ之ヲ積極ニ決シタモノト思ハレル」(法學全集土地收用法四一頁)

三、尙漁業法第七條ニ所謂「土地ニ關スル規定」ニハ土地收用法ヲ包含スルガ故ニ漁業權ハ元來土地收用法ノ準用ニ依リ收用シ得ル權利ナリトスルモノ卽チ漁業權收用ノ根據ヲ漁業法第七條ニ求メントスル說モ有ルノデアル。然シ斯カル說ハ是認セラルベキデハナイト考ヘル。

成程土地收用法ハ土地ニ關スル法律デアル。然シ(一)漁業法第七條ガ「漁業權ハ物權ト看做シ」「土地ニ關スル規定ヲ準用ス」「民法第二編第九章ノ規定ハ漁業權ニ之ヲ適用セス」ト云フ所以ハ漁業助成ノ見地カラ取引上ニ於ケル漁業權ノ效力ヲ確保セントスルモノデアツテ此ノ事ハ次ノ如キ漁業法案ノ議事錄ニ依ツテモ其ノ立法趣旨トシテ推知スルニ難クナイ。「此ノ改正案ハ七十條ノ多キ規定ニ成ツテ居リ……漁業權ナルモノヲ物權ト看做シテ土地ニ關スル規定ヲ準用致シ漁業權者ガ資金ヲ得ルノ途ヲ便利ニ致サウト云フ箇條ガ最モ此ノ改正案ノ骨トナツテ居リマス」(明治四三、三、一一、衆議院、委員長報告)。「漁業ノ資金ノ融通ヲ付ケルト云フ事ハ遙テ漁業界ノ問題トナツテ居ルコトデ御座イマシタガ今回勸業銀行、農工銀行拓殖銀行法等ノ法律ニ改正ヲ加ヘテ此ノ漁業資金融通ノ途ヲ開クト云フ案ヲ既ニ衆議院ニ政府ヨリ提出ニナツテ居リマス、之ト共ニ漁業法ノ改正ヲ致シマシテ漁業權ヲ抵當權ノ目的トスルト云フコトノ必要ガ有ルノデ御座イマシテ是ガ今回此ノ法律ヲ改正スル第一ノ要點デ御座イマス」(明治四三、三、一四、貴族院、政府委員說明)。從テ同條ヲ以テ直ニ漁業權收用ノ可能ヲ包含シテ規定スルト斷ズルニハ聊カ躊躇セザルヲ得ナイノミナラズ(二)憲法第二十七條第二項ガ「公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル」ト規定スルハ、公益ノ爲必要ナル處分ノ根據ニ付テハ公益上ノ見地カラ特ニ定メタル法律規定ノ存スルコトヲ要シ之ニ基イテノミ右處分ヲ爲シ得ル趣旨ト嚴格ニ解ス可キデアツテ土地收用法ハ勿論同法ヲ適用スル場合ヲ定メル製鐵事業法、航空機製造事業法航空法、都市計畫法等或ハ又獨立シテ收用ヲ定メル國家

總動員法、市制、町村制、河川法、砂防法等ノ當該規定ハ何レモ直接ニ公益ノ保護乃至ハ助成ノ見地ニ立ツノデアル。然ルニ同條ヲ以テ苟クモ法律ナル形式ヲ有スルモノナラバ其レガ單ナル取引上其ノ他ノ便宜ヲ目的トスルモノデアツテモ右處分ノ根據トナリ得ルガ如ク解シ漁業法第七條ノ如ク單ナル漁業權ニ關スル取引上ノ便宜ヲ目的トスル規定ノ文字解釋ニ依リ結果的ニ漁業權收用ノ可能ヲ說明付ケルガ如キハ臣民ノ權利ノ保障並ニ公用徵收ノ精神ヲ看過シタル論ト言ハネバナラヌノデアル。

四、思フニ漁業權、鑛業權等ノ如ク所謂產業法規ニ基ク特殊ノ權利ト公益事業トノ衝突ハ現行土地收用法ノ解釋等ニ膠着スルコトナク特別ノ立法手段ニ依リ解決スベキ問題デアラウ。

五、共有地ノ持分ノ收用

（內務廣島縣知事宛　昭和十三年四月十三日甲第一四號　土木局長回答）

（**要旨**）共有地ノ持分ハ土地收用法第七條ノ規定ニ所謂土地ニ關スル所有權以外ノ權利ニ該當スルモノニ非ス

起業者カ收用スヘキ土地ノ共有者ノ一人ナル場合ニ於テハ他人ノ有スル持分ヲ收用シ得ルモノトス

（**原文**）本年三月十日土經第一九二四號ヲ以テ標記ノ件御照會相成候處右ハ土地收用法第七條ノ規定ニ所謂其ノ他土地ニ關スル所有權以外ノ權利ニハ該當セサルモ本件ノ如ク起業者モ亦共有者ノ一人ナル場合ニ於テハ他人ノ有スル持分ヲ收用シ得ルモノト存候

（廣島縣知事伺）　土地收用法第七條ノ適用ニ關スル件——標記ノ件左記ノ點ニ關シ疑義相生シ差懸リタル事案有之候ニ付テハ至急何分ノ義御同示相煩度及禀伺候也

記

土地ニ關スル共有者ノ一人ニ屬スル持分（起業者ト共有ニ係他ルノ者ニ屬スル持分）カ獨立シテ收用ノ目的ヨリ得ルヤ否ヤニ付一說ニ曰ク持分ハ之ヲ擔保ニ供シ又ハ讓渡シ得ヘク又不動產登記法ハ不動產上ノ持分ノ登記ヲ許ス等ノ點ヨリ觀察シテ持分ハ收用ノ目的トナリ得ルモノト解セムトナスト雖モ他ノ說ニ於テハ持分ノ性質ハ一ケノ所有權カ各共有者ニ分量的ニ屬スル所有權行使ノ割合ヲ示シ權利義務又ハ權利義務ノ總合ニモ非スシテ寧ロ權利義務ノ源泉タル一種ノ法律上ノ地位ニ過キス而シテ擔保又ハ讓渡ノ目的タリ得ルハ法律カ便宜上權利ニ非サルモノノ法的處分ヲ許セルモノニシテ擔保又ハ讓渡ノ目的タリ得ルモ

ノ部權利ト謂フヲ得サルヘク又登記法上持分ノ登記ヲ許容セルハ共有物カ不動産ナルカ爲ニシテ持分ノ性質トハ無關係ナリトス然ルニ於テハ持分ハ權利ニ非スシテ地位ニ過キサルヲ以テ土地收用法第七條ノ規定ニ所謂「其ノ他土地ニ關スル所有權以外ノ權利」ト謂フニ該當セサルヲ以テ持分ハ獨立シテハ收用ノ目的タリ得サルモノト存セラル

註、若シ共有ヲ以テ同一物ニ對シ數個ノ所有權ノ重複競合セル狀態卽チ一物一所有權ノ原則ニ對スル例外的現象ナリト解シ得ルナラバ起業者ガ他人ノ所有權ヲ收用スルニ於テ何等疑問ノ生ズル餘地ハナイ。然シ我民法ノ解釋上共有ハ一個ノ所有權ガ數人ニ所屬スル狀態ナリトセラレル。從テ所有權トノ關係ニ於ケル持分ノ本體ノ說明困難ト收用上起業者モ亦所有者ナリト云フ表見的矛盾トガ疑問ノ根源トナルノデアルガ一個ノ所有權ガ數人ニ所屬スル以上其ノ共有者各人ノ所有權ノ行使權能ハ各完キヲ得ナイノデアツテ其ノ分量アル行使權能ニ觀念上對應スル所有權ヲ以テ持分ト言フト解スベキデアツテ、質問ニ於ケル如ク所有權ヲ離レテ持分ナルモノガ別ニ存在スルト見ル可キデハナイ。

從テ起業者ガ他人ノ持分ヲ收用シ得ルハ當然デアルガ唯起業者ガ自己ノ有スル持分ヲ收用スルト言フコトハ收用ノ本質上認メ得ナイ所デアルカラ、土地ハ起業者ヲ含メタル數人ノ共有ニ係ルモノトシテ表示セラレルガ、起業者ハ土地收用法上ニ所謂土地所有者(第五條)トシテノ共有者中カラハ總テノ場合ニ於テ除外セラレルハ言フ迄モナイ。

第七條ノ二　本法ハ第二條ニ規定スル事業ノ用ニ供スヘキ土地ニ定著スル物件又ハ之ニ關スル權利ヲ其ノ事業ノ用ニ供スル爲ニ收用又ハ使用スル場合ニ之ヲ準用ス

一、本條ノ法意

(內務昭和二年改正案說明書)

(要旨)本案ハ土地ニ定著スル物件ノ存在ヲ前提トシテ公共事業ヲ起ス場合ニ於テ其ノ事業ノ用ニ供スル爲定著物件又ハ之ニ關スル權利ヲ收用又ハ使用スルノ途ヲ開キタルモノニシテ公共用地ヲ離レ獨立シタル定著物件ノ收用ヲ認ムルモノニ非ス

(原文)物件ノ如キ性質上代替シ得ヘキ性質ノモノノ强制徵收ハ

之ヲ許スヘキニ非サルハ勿論ナリト雖土地ニ定著スル物件ノ存在ヲ前提トシテ公共事業ヲ起ス場合ニ於テ土地ハ之ヲ强制取得スルコトヲ得ルモ其ノ物件ニシテ所有者ノ自由處分ニ任スルトキハ遂ニ公共事業ヲ遂行スルコト能ハサルニ至ルヲ以テ其ノ事業ノ用ニ供スル定著物件又ハ之ニ關スル權利ヲ收用又ハ使用スルノ途ヲ開カムトス本條ノ適用アル場合ハ土地ハ任意買收ニ依リ取得シタルモ其ノ土地ニ定著スル物件ヲ必要トスル場合又ハ土地ト共ニ定著物件ヲ收用スル場合ニシテ公共用地ヲ離レ獨立シタル定著物件ノ收用ヲ認ムルモノニ非ス

註一、第四十五帝國議會ニ提出セラレタ本法改正案中本條ニ該當スルモノニハ「本法ノ規定ハ土地ニ定著スル物件ニシテ之ヲ收用又ハ使用スルニ非サレハ事業ノ目的ヲ達スルコト能ハサルモノヲ其ノ土地ト共ニ收用又ハ使用スル場合ニ之ヲ準用ス」ト規定セラレテ居タ。趣旨ハ本條ト何等異ル所ガ無イ。

二、都市計畫法第十七條ハ物件ヲ獨立ニ收用シ得ルコトヲ規定スル。土地區劃整理或ハ建築物整理ノ爲必要ナル場合デアツテ本法ノ趣旨トハ異ル。

二、定著物件竝之ニ關スル權利ノ意義

（一）（內務昭和二年改正案說明書）

（要旨）土地ニ定著スル物件トハ民法第八十六條ニ所謂定著物件ト同一ノ意義ニシテ土地ト獨立シタル不動產ヲ言フ

（原文）土地ニ定著スル物件トハ民法第八十六條ニ所謂定著物件ト同一意義ニシテ土地ト獨立シタル不動產ヲ言フ立木ニ關スル法律ニ依リ登記シタル樹木ノ集團モ亦不動產ト看做サルルカ故ニ玆ニ所謂定著物件ニ包含ス

（二）（五二議昭和二年三月十八日貴族院特別委員會）

（要旨）「之ニ關スル權利」トハ土地ニ定著スル物件ニ關スル權利ヲ指稱シ立木ニ關スル抵當權ノ如キハ之ニ屬ス

（政府委員答）「之ニ關スル權利」ト申シマスノハ土地ニ定著スル物件ニ關スル權利デアリマシテ、抵當權ノ如キハ之ニ關スル權利ダラウト思ヒマス、立木ヲ抵當ニ入レテ金ヲ借リテ居ル其ノ債務ガ不履行ニ終ツタ時ニ抵當權ヲ行使セラレテ立木ヲ伐ラレテ了フト大變デアルカラ其ノ抵當權ヲ收用スルト云フ場合モ起ルダラウト思ヒマス

三、立木ト土地收用法

（四五議大正十一年三月二十二日 衆議院特別委員會）

（要旨）土地收用ニ於テモ立木ト土地トノ關係ハ民法上ノ解釋ニ依ルヘキモノニシテ土地ト一體ヲ爲セル場合ハ一物トシテ收用シ土地ト一體ヲ爲ササルトキハ各別ニ收用スヘキモノトス

（問）立木、是ハ日本ノ民法ノ解釋デハ土地ト一體ヲ爲スモノト云フコトニナツテ居リマスガ、立木抵當法ト云フモノガ出來テカラハ立木ガ獨立シタ財產デアルト云フコトニ認メラレテ居リマスガ、日本ノ法律ガ立木ニ關シテ徹底ヲ缺イテ居ルコトハ御承知ノ通リデ、本法ノ適用ニ於テハ立木ヲ如何ニ觀ルカ之ヲ土地ノ一部ト觀ルカ獨立シタモノト觀ルカト云フコトニ付テ當局ノ御取扱振ヲ御話ヲ願ヒマス

（政府委員答）只今ノ御尋ハ要スルニ民法ヲ解釋スル其ノ觀念ニ依ラナケレバナラヌ事デアリマシテ「土地ト併セテ一體トシテ考フベキ場合ニ於テハ一ツノ物トシテ之ヲ收用シ、分ツテ考フベキ場合或ハ慣習等ノアルトキハ分ツテ之ヲ考ヘテ收用スル」ト、斯ウ御答スルヨリ外ハナイト思ヒマス。實ハ今度ノ改正案ニモ出シテアリマスル第七條ノ二ノ此ノ規定ノ如キハ是ハ要スルニ半面カラ――土地ニ定著シテ居ル物件デモ――所有者ハドン〳〵木ヲ伐ツテ持ツテ行クコトガ出來ルト云フ其ノ場合ニ對スル豫防ノ規定デアリマスノデ詰リ今ノ土地ノ一體ヲ爲サヌ場合ノ事柄ヲ豫想シテノ規定ニナツテ居ルノデアリマス、要スルニ民法ノ觀念ニ依ツテ只今ノ御尋ノ點ハ決定セナケレバナラヌト考ヘテ居リマス

四、「事業ノ用ニ供スル爲」ノ意義

（五二議昭和二年三月十八日 衆議院特別委員會）

（要旨）「事業ノ用ニ供スル爲」トハ直接其ノ事業ノ用ニ供スル場合ヲ云ヒ事業ノ遂行上障害トナルヘキ物件ヲ除却スル場合ノ如キヲ包含スルモノニ非ス

（問）第七條ノ二ノ改正案中ニ「其ノ事業ノ用ニ供スル爲」トアリマシテ其ノ目的ガ限定サレテアルノデアリマスガ此ノ目的中ニハ其ノ物件又ハ權利ヲ直接其ノ事業ノ用ニ供スル爲ノ場合デアルノカ又ハ土地ノ收用使用ノ必要上是等ノモノヲ除却スルノ必要アル場合ト云フノモ此ノ中ニ加ハルノデアリマスカ

（政府委員答）御質問ノ「其ノ事業ノ用ニ供スル爲」トアリマスノハ直接其ノ事業ノ用ニ供スル爲メ丈ケデアリマシテ其ノ事

業ヲ遂行スルガ爲ニ邪魔ニナル場合ハ此ノ中ニ包含致シテ居リマセヌ例ヘバ學校ヲ造ラウト致シマシテ敷地ヲ土地收用致シマス其ノ場合、敷地トナルベキ土地ノ上ニ建物ガ在ル、建物ガ在ツテハ學校ガ出來ナイト云フ樣ナ場合ニハ其ノ建物ハ收用致シマセヌノデアリマス、併シ其ノ土地ガ既ニ學校ノ敷地ニナリマシタ以上ハ其ノ建物ノ所有者ハ移轉料ヲ貰ツテ其ノ建物ヲ他ヘ移轉シナケレバナリマセヌ、是ハ移轉ノ義務ガ此ノ建物ノ所有者ニ負ハシテアルノデアリマシテ御話ノ樣ナ邪魔ニナル場合ヲ第七條ノ二ノ「其ノ事業ノ用ニ供スル爲」ト云フモノニ含マセヌデモ差支ヲ生ジナイ樣ニナツテ居ルノデアリマス

五、本條ト第二條ノ二ニ依ル收用

（五二議昭和二年二月十九日貴族院特別委員會）

（前出第二條ノ二資料四參照）

第八條　本法ノ規定ハ土地ニ屬スル土石砂礫ノ收用ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

（正誤）本稿中左ノ通訂正致シマス

號	頁	行	誤	正
四	一六九	上一	收用權ニ付テ	收用權者ニ付テ
〃	〃	上一〇	大正十一、	大正一一、
〃	一七五	上二	畧ル	異ル
〃	〃	下八	埋設	埋沒
五	一七三	下六	公共ノ利害	公共ノ利益
六	一六二	下最後	ノ事業	ノ乙事業
〃	一六七	下一四	重要ナル	ヨリ重要ナル